

リレー随筆

「先生」と呼ばれて

鹿児島大学病院 研修医 市地さくら

せん-せい【先生】

先に生まれた人。 学徳の優れた人。自分が師事する人。また、その人に対する敬称。

学校の教師。 医師・弁護士など、指導的立場にある人に対する敬称。 他人を、親しみまたはからかって呼ぶ称（広辞苑より）。

「先生」という声がすると、振り向いてしまうようになった。

医師免許を取得して1年が過ぎた。自分より遥かに人生経験を積んだはずの年配の患者さんは申し訳なさそうに、小児病棟では小さな子供が点滴の繋がった手でこちらを指し笑顔で、私を「先生」と呼ぶ。患者さんや、知識も技術も経験値も上の看護師さんたちにそう呼ばれることに対して、当初はとても違和感があった。呼ぶ方はそこまで深く考えていないだろうが、何もできない自分は“先生”ではないと、何か悪いことをしているような気持ちを抱いていた。

働き始めてから1年が経って、できることはそれなりには増えた。「先生、処方切れるんだけど…」と言われれば、電子カルテに打ち込んで処方箋を出すことくらいはできる。それでも私にできることは本当に限られていて、能力的にも人間的にも、1年前に比べて劇的に偉くなったわけではない。しかし慣れというのは怖いもので、1年前に感じていた違和感を覚えることはなくなってしまった。

研修医として働き始めた昨年4月、救急部にひとりの女性が歩いてきた。ねずみアレルギーの彼女はねずみに噛まれてしまったとの

ことで、自分で経緯を説明でき見た目にはそれほど重症感はなかったが、軽度の呼吸苦と皮膚の紅潮を認めていた。アナフィラキシーショックとしてアドレナリン筋注を行うことになったが、私は用意された22G針を見て思わず「筋肉にこの針を…痛そう…」と小さく声に出してしまった。自分でもしまったと思ったが、上級医の先生に離れたところに連れて行かれて、本当にもっともお叱りを受けた。

“医者には、何でも知っているように振る舞うことが肝要だ”

ドイツの医師で小説家でもあるハンス・カロツサの言葉である。時には自身の命まで預ける患者と、全てを預けられる医師という関係性。「先生」という呼称は、その重さを表しているようにも思える。カロツサの頃と時代は変わっていて、知らないことは知らない、正直に言うほうがいいのかもかもしれない。それでも、何も知らない“先生”として1年間現場で働いて、やはりこの言葉も正しいと思う。

救急部のときほどの初歩的なエピソードではないが、これまで、働きながら自分に呆れることは何度もあった。それでも研修医2年目になり、「先生」と呼ばれることにも慣れた。“知っているように振る舞うこと”も随分上手くなってきたかもしれない。広辞苑で調べてみると“先生”には複数の意味が載っていた。私は明日も「先生」と呼ばれるだろう、きっと広辞苑の の意味で。いつかの意味で“先生”になれる日はくるのか…

今回この随筆のお話をいただきましたが、これまでの先生方のように、熱く語れるような趣味や体験談、日常の出来事が思い浮かばず、義務化された小論文のような内容しか書けない自分を情けなく思います。私の今の目標は、の意味で「先生」と呼ばれるような医師に成長することと、こういう機会にもっと気の利いた内容の文章を書けるような人間になることです。拙い文章にお付き合いいただきありがとうございました。

次号は、鹿児島医療センターの矢野えりな先生のご執筆です。
(編集委員会)